日本山岳会
越後支部報

第　23　号
平成30年10月22日
発　行　公益社団法人日本山岳会越後支部
発行者　遠藤 家之進正和
新潟県新潟市南区鷲ノ木新田1049
TEL・FAX 025－362－5004
広報委員長　佐久間　雅義

私の一枚

花の飯豊

飯豊は花の名所である。特にハクサンイチゲは、群落の規模や花の密度においても飯豊に勝るところを知らない。

この花は毎年6月2週ころに満開となる。写真の撮影地は大石山です。ロケーションの良さもあってここが一番気に入っている。コーヒーなどを飲みながらのんびりと過ごします。

撮影　鈴木　勝利

素晴らしき仲間たち

副支部長　桐生　恒治

１９７０年ＮＨＫの報道番組で日本山岳会エベレスト登頂に心を躍らせて、いつの日かヒマラヤに挑戦したいと思い、夢と仲間を求め１９７３年日本山岳会に入会しました。大学山岳部で育ち、北アの剣や穂高をベースに登山に熱中、Ｇ・マロリーの「より高く、より困難な、より美しい山」を目指す理想に憧れました。お陰で日本山岳会の冠を付けて、１９７３年、１９７６年、１９８５年にヒマラヤ登山を３回経験することができました。学生から社会人となり、もの作りの生産的仕事に携わると、登山と言う非生産的趣味との両立が難しく、海外登山に理解が得られなくなり、中国黄河源流（玉珠峰）登山の１９８５年に新潟へＵターンし越後支部へ編入しました。しかし、その後20数年間は、山を忘れて幽霊会員となり不義理を続けていました。

２０１０年頃に当時の山崎支部長から「そろそろ手伝え！」と声がかかり、県山協委員や事務局長を引き受け、その後に橋本前支部長に仕えて人的交流も拡大、４年間の事務局経験で多くの支部会員と知り合うことができました。２０１５年から遠藤支部長の下で副支部長として、支部伝統行事を盛り上げ、新しい企画を提案実施してきました。子供の頃に、生まれた故郷の守門に登り、学生時代に魚沼三山・浅草・巻機、飯豊・二王子、妙高・火打なども登りましたが、越後支部会員でありながら越後の山に登った経験が少ないと言うお粗末さに気づきました。このため支部活動の中に事業委員会や集会委員を設け、精力的に越後の山に登ることを始めました。特に70周年記念事業として実施した「３００名山越後支部21座踏破計画」は、多くの支部会員との交流を拡大する貴重な機会となり非常に意義ある経験になりました。

県北村上から県西糸魚川までの県境山脈と佐渡山塊を含めれば総延長６００㎞以上となり、１、０００～２、０００ｍ級だが全国に類のない豪雪山岳地帯で、それぞれ地元の山に精通した多士済々の支部会員が多数いることを知りました。山の伝説や習慣、木や花の固有種の名前、四季の動物習性、山を知り尽くした博識な実態説明を聞きながら、今まで自分が山で会得したことは、なんと底の浅い貧困なものだったかと痛感した次第です。越後支部の素晴らしき仲間たちとの出会いに感謝し、これからも越後の山を登りたいと思っています。

越後支部は、日本山岳会創設メンバーで第２代会長高頭仁兵衛翁の登山精神が原点にあり、戦後いち早く支部を創設した藤島玄氏を始祖とし、日本山岳会の中核を成す権威ある支部です。支部には越後の山々に精通した貴重な人材が多数おり、今後も支部の仲間たちとの山登りを通じて、交流の輪を広げ情報発信して行きたいと考えています。

峠シリーズ

関川村の峠

渡邊　忠次

「峠」の文字を一目見て大概の人はその意味するものがすぐ解ると思います。山を上って下る。日本で作られた国字（和製漢字）だそうです。古来峠は国境となっていて、その先は異郷の地でした。通行人はこれから先の旅の無事を祈り、帰り着いた時には感謝をして道祖神に手を合わせて拝んだ「手向け（たむけ）」が語源と広辞苑にあります。

関川村に峠の名がつく所がいくつかあります。国道２９０号村上市との村境にある桃川峠、県道の鉈打峠は村民の生活に不可欠な重要な道路となっていますが、登山を趣味としている越後支部会員の皆様には、近年文化的歴史的地域資源として、またハイキング道として注目されている「米沢街道十三峠」のうち関川村の３峠をご紹介させていただきます。

山形県の米沢市から新潟県関川村を結ぶ延長約70㎞の街道は新潟県側からは「米沢街道」、山形県側からは「越後街道」と呼ばれ、山形県川西町小松から関川村下川口の約60㎞区間に大小13の峠がありますが、そのうち「鷹ノ巣（たかのす）峠」「榎（えのき）峠」「大里（おおり）峠」の３峠が関川村にあります。

歴史を辿れば、１５２１年（大永元年）伊達14代稙宗（第17代独眼竜正宗の曽祖父）が大里峠を開いたのが始まりといわれ、その後順次東側ルートが整備され、江戸時代の初めには十三峠が完成したと言われています。越後から塩を主とする海産物、米沢方面から米、青苧、煙草などの交易が盛んに行われました。この峠道は１８６８年（慶応４年）８月戊辰戦争の舞台となり、１８７８年（明治11年）７月イギリスの女性旅行家イザベラ・バードが苦労して通ったところでもあります。今年バードが来県１４０年目と言う事で、県内のまち歩きガイド団体有志が「新潟イザベラ・バード研究会」を２月に設立したとの記事が４月７日新潟日報朝刊に掲載されていました。１８８５年（明治18年）山形県初代県令三島通康により新潟山形線（小国新道・国道１１３号線）が開通してからは殆ど使われなくなり時代の流れに埋もれてきました。

大里峠の祠

関川村の３峠

１「鷹ノ巣（たかのす）峠」

新潟県側最初の峠。林道と古道が交互に現れる峠道で、緩やかな傾斜で歩き易く、標高１５５ｍ、ピークが２つあり延長約２㎞。１時間くらいでゆっくり歩けます。下川口から入山し鷹ノ巣温泉駐車場から国道１１３号合流地点の大内淵が下山口です。

２「榎（えのき）峠」

１８６８年（慶応４年）８月12日戊辰戦争で米沢藩と官軍（新政府軍）との戦場となったところです。国道１１３号から急坂の階段を登り、そこから出口の沼まで1.9㎞。峠の頂上１８７ｍに観音像が祀られ一里塚的役割もしていたと言われています。因みにネットで榎峠を検索したら全国に10か所ありました。全国山名地名辞典があるように、仮に全国峠辞典なるものがあるとすると、きっと膨大な峠名が記載されていることでしょう。

３「大里峠」

県境の峠で、「大里峠大蛇伝説」の舞台となった標高４７８ｍの峠です。十三峠では宇津峠（４９１ｍ）に次いで２番目の高さです。畑鉱山跡から山形県小国町玉川まで4.6㎞、頂上に祠があり３時間あればゆっくり踏破できます。入口の沼集落はイザベラ・バードが宿泊したところで著書「日本奥地紀行」に載っています。畑鉱山跡は銅鉱山で、最盛期には従業員が２００人を超えました。終戦の昭和20年に閉山しました。

大里峠が新潟、山形の県境であることから、隣の小国町と関川村共催で毎年10月に大里峠越え交流会を行い、両町村の親交を深めています。

米沢街道・十三峠の山形県側は、平成８年に文化庁の「歴史の道１００選」に選ばれた３、６００段の敷石が続く「黒沢峠」や、標高が一番高く険しい「宇津峠」など幾つかの峠が文化的歴史的地域資源として地元集落やボランティア団体、自治体などにより整備保存され、十三峠を踏破するイベントや、峠まつりなどで活用されています。

三角点山に登る

小田　捷寿

５月26日総会が関川村高瀬温泉で行われた。その翌日、今年度最初の親睦登山を関川村の三角点山（５７６・５ｍ）で行われた。総勢34名の出席で、駐車場は会場から車で15分程度の所に平の木平コースの出発点があった。病み上がりの自分としては、体力的に不安もあったが、昨夜の総会後の飲み会と会員の高齢が自分のペースに合わせてくれたと思っている。登山口の駐車場は広く、駐車スペースは十分にあった。

平田大六さんをＣＬに、道案内人渡邊忠次さん、最後尾に遠山實さんをＳＬに従えての総勢34名の日帰り登山である。

８時20分に平ノ木平コース登山口を出発する。登山道は刈り払いしたばかりで、しかも緩い登りなのでとても歩きやすかっ

た。左側は杉林、右側はナラの広葉樹で約30分歩くと山頂から続く尾根にぶつかり左へ行く。少し行くと休憩地の平ノ木平である。ここで約10分位休憩、平田CLは持ってきた欅の標識を付ける。何でも自分で書いた物を、関川山の会の高橋健吉会員が掘ったそうで、これなら当分もちそうだと思った。休憩後また歩き始めるがブナの広葉樹のせいか涼しい。ここからは直径1mをもある赤松と五葉松が尾根伝いに生息する。この大きさはあまり見ない。誰かがマツタケが出そうだと言ったが、こんな所には出ないだろう。自分はマツタケを毎年取りに行くからわかる。

平坦な松林の大木を過ぎるとブナの広葉樹が続く。こんなに近くにブナ林があるのも驚きで、まだ新緑が若く大小のブナが広く生息している。肌が白くきれいで、まっすぐ伸びている。天気が良いわりには、空気が爽やかで木陰なので涼しい。広葉樹の木陰が気持ちよい。

次の休憩場所は、ブナ林の中の「ナガメバ」である。ここも休憩地で標識を付ける。昔の熊取が呼んでいた名前で、今もその名を伝えているという。

ゆるい登りをずっとゆっくり歩きながら、山頂に着いたのは10時頃。確かに石の三角点はあって山頂とわかるが、木々が大きくなり見晴しはあまり良くなかったが、自分にはちょうどよい日帰り登山と思った。ここで山頂の標識を付けみんなで記念撮影をする。その後、早めの昼食となった。

三角点山山頂にて

皆さん和気あいあいと食事をする。

11時下山、反対方向に道があったので何名かは反対方向へ下り、待ち合わせることにした。駐車場12時着。

自分はその後、初代会長の藤島蔵書のある旧川北小学校へ向かった。ここで解散の話だったが、皆さんは昨夜の旅館へ風呂に行ってそこで解散したようである。藤島蔵書は3階で渡辺隆吉会員、齋藤チヨ会員、坂井厚会員が受付にいたが、誰も来ないので帰ろうとしていた。

思ったより楽に登れたことと、標高も低く日帰りの自分にはちょうど良かった。登山道も刈り払いがされていて歩きやすかったし、ブナ林の若葉がきれいで涼しかった。秋にもう一度来ようと思ったし、年齢からしてこれからは低山徘徊かなと思った次第である。

公募登山『白鳥山』（1、286・9m）

井口　礼子

『栂海新道』。故小野健さんとの出会いが思い出される。3年ぶりの白鳥山である。栂海新道を拓（ひら）いた時の大変なご苦労を、熱く語っておられた姿が目に浮かぶ。

私が憧れの栂海新道を歩き終わった時、他の山とは違う感動を覚えたのは、小野健さんの思いが詰まった登山道を歩いたからなのだろうか。

親不知ICで高速を降り、親不知コミュニティ駐車場で鶴本さんと合流。「第30回海のウェストン祭」が開かれたウォルター・ウェストン像の前で、鶴本さんからウェストンや小野健さんのお話し、栂海新道終点（又は、出発点）の海抜0mがここから80m下である事、開通してから今年で47年となる事、もっと多くの岳人から栂海新道を歩いて貰いたい、等々のお話を頂いた。その後、坂田峠に向かう。

ガスが山々の上部を覆い、「雨になるかも……。景色も見えないかも……。」と話したりしていた。坂田峠に到着し、準備・ストレッチ体操を行い1班と2班に分かれ9時20分出発。

まずは、坂田峠の役割（海岸沿道が不通の時、旧上路村から橋立村へ通じる峠道であり、越中と越後を結ぶバイパス道として）について鶴本さんより、説明を頂いた後、登山口へ。

登山口から、いきなりのハシゴあり、段差ありの急登である。「金時坂ノ頭」まで登ると一息つくことができる。ここから緩やかな下りとなり、シラネアオイやショウジョウバカマが咲く小雪渓を渡ると、唯一の水場「シキ割」である。冷たい清水を飲む。水場の周りにはクロクモソウの葉がたくさんあり、水場を守っているように思えた。シキ割から、毎年遅くまで残る沢の雪渓を少し登り、尾根道へと入る。

ここからは、ブナ林の中を小さなアップダウンを繰り返しながら登る。時々、心地

「シキ割」近くの小雪渓

良い風が吹き、疲れを癒してくれる。下の方を見ると、雲海になっている。「良く整備されている登山道だね。」との声に、小野健さんの遺志を継いで、登山道整備に汗を流しておられる方々へのご苦労に感謝しつつ、休憩をはさみ、水分補給しながら山頂へと向かう。

白鳥山避難小屋にて

「山姥（やまんば）平」辺りからは、ミツバオウレン・ツマトリソウ・アカモノが咲き、遅い春を告げる。目の前に白鳥山避難小屋が見えると、白鳥山山頂である。12時15分到着。

山頂到着後、鷭本さんから、少し雲のかかる「犬ヶ岳」・「黒岩平」・「朝日岳」等、栂海新道の山々の説明をお聞きした。遠くには「剱岳」も……。感激ひとしおである。

昼食後、班毎に記念写真を撮り、1班から下山開始。下りは皆さん、とても軽やかに。でも、雪渓と金時坂ノ頭からは慎重に下り、2時間ほどの15時頃、登山口に到着。小山さんが少し登って迎えに来てくださり、山行を労って頂きました。

雨を覚悟しての山行であったが、一時、青空が見えたり、薄い陽光が射したりして、「予報よりもお天気が良く、ラッキーだったね……」と感謝しあった。小山さんによると、「坂田峠辺りは、ずっとガスがかかっていて、お天気どうかなあ……」とちょっと心配しておられたとの事。そういえば、下の方はずっと雲海だった。時期が少し遅く、白いカタクリを見ることができなかったが、楽しく、お喋りいっぱいの白鳥山山行でした。皆様、有難うございました。

弥彦山たいまつ祭に参加して

知野　勇人

7月25日、第61回高頭祭と第65回新潟県登山祭に参加しました。

今年は短い梅雨が明けた後、連日の猛暑でこの日の暑さも焼けるようでした。弥彦山上大平園地の高頭仁兵衛翁寿像碑前には70名程の参加者が集い、恒例の式典が行われました。平田大六氏の妙味ある神事の後、女性会員から高頭翁像へ御酒が奉献されました。

その後、近くの東屋に移り野澤誠司日本山岳会副会長から記念講演として「ユースクラブへの取り組み」などを拝聴しました。今後の支部の活性化に繋がる話をご教示いただきました。

夕刻、弥彦山山頂に移動し新潟県登山祭が行われました。安全祈願のご祈祷や日本山岳・スポーツクライミング協会の八木原圀明会長の山の日記念講演の後、２００名近い参加者は各自たいまつを持って山頂を出発しました。途中、昔は「麓からたいまつの行列がよく見えたが、今は木の枝が繁ってよく見えなくなった。」と言う会話を耳にしました。昭和29年から始まった登山祭のたいまつの灯を晩年の高頭翁は見ることがあったのでしょうか。夜空を彩る花火の歓声と燈籠祭の賑わいの中を弥彦駅までのパレードを行いました。この日のためにご尽力された弥彦山岳会及び関係者の皆様に深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

弥彦山山頂にて

弥彦神社前をパレード

「山の日」制定記念

第2回糸魚川世界ジオパーク「子ども登山教室」

湯本　浩司

5ヶ年計画の糸魚川世界ジオパーク「子ども登山教室」第2回目が8月11日「山の日」に新潟県山岳協会共催のもとスタッフを含む総勢35名にて糸魚川市蓮華の森自然遊歩道を舞台に実施されました。遠藤家之進正和日本山岳会越後支部長より出発前に激励の挨拶をいただきました。

当日は昨年に続く霧雨となりましたが、子どもたちの心をへこますことなく、バスで移動中から「おもしろ自己紹介」に始まり、標高に伴う植生変化の観察、現地散策

では豊かな森の植生には食物連鎖が不可欠なこと、ブナの木の肌模様は「地衣類」の共生で作られていること、兵馬の平湿原では火山活動を背景とした成り立ちや湿原の植生、モウセンゴケは実際に粘液に触れたり虫を捕まえたものの観察を行ったりなどして絶え間なく子どもたちの好奇心を煽り、保護者やスタッフもが勉強になる丁寧な展開が鷲本委員長よりなされました。ブナ林の小休止に鷲本委員長の「森の植生」について、熱心に聞き入ってました。

スタッフにも「地衣類」が織りなすブナの肌模様の説明は、いいお勉強になりました。スタッフも子供も良いお顔で真剣に聞き入ってました。モウセンゴケは、みんなで粘液を触ったり、虫を捕まえたものがいないか観察しました。

カモシカ展望台は晴れていれば、大きな景色が広がっています。クロベ（ネズコ）の巨木大きかったですね。

最後の締めに新潟県山岳協会ジュニア委員長の小林 勇副実行委員長より閉会の挨拶を頂きました。バスの移動中でのラジオ収録番組の披露内容も大変良かったですね。

変化の多い周遊コースを楽しんだのち蓮華温泉で汗を流し、帰りは子どもたちに「作文提出」という「おまけ」が付きましたが、どの子も満足気な様子でした。来年以降もここ蓮華温泉周辺を舞台に計画されていますが、次回こそは3度目の正直で晴天の「大展望の感動」を子どもたちに与えてあげたいと思います。

蓮華温泉ロッジ前にて

靴音・よりあいの集い

日本300名山の講演と飯士山登山

立入　清

会員相互の親睦をふかめる「靴音・よりあいの集い」も第4回の開催となった。今回は、6月16～17日に湯沢町の温泉民宿「高野屋」と飯士山を会場に実施され21名の参加をいただき楽しい2日間を堪能させていただきました。会員は200kmという遠方から参加された方もおられ、さすが新潟県は広いなと感じられる。

第一部は、会員の遠藤俊一様から「300名山さまざま」という演題で講演をいただいた。日本100名山は多くの方が知るところであり達成された方々を聞くことも多いですが200名山、まして300名山の達成はあまり聞いた事がない。達成には「気力・体力・行動力・環境」と誰もができる事ではない。その中でも300名山の達成の遠藤さんの行動力には頭の下がる思いである。

講演の中で名山候補の作成においては100名山・300名山・200名山の順に作られたという事にびっくりするとともに300名山には入っているが200名山にはない山もあるという事を初めて知った。山の魅力や名山は個人の思いによるものでありそれも魅力のひとつだろう。

スライドを見ながら「印象深かった山・山頂を踏めなかった山・登山道のない山」の話を聞き、羨ましかったり感心したりと楽しい時間を過ごさせていただいた。

温泉で汗を流し楽しみにしていた第二部の懇親会では懐かしい会員との再会を果たすことができ、酒飲みには楽しい時間を過ごさせていただいた。

紹介していただいた温泉民宿「高野屋」は美味しい食事と温泉、リーズナブルな宿泊費でゆっくり過ごさせていただいた。

翌日は親睦登山が開催された。以前アルプの里の対岸にポコッと見えて気になっていた山が今回の飯士山である。低山であるが1，111mと嬉しくなる数字の山であり行動時間も手頃で登りやすい山ではないだろうか。しかし、山においては油断禁物である。

当日は晴天に恵まれたことは参加会員の日頃の精進のおかげであろう。岩原スキー場から周囲の山々を見ながらゲレンデを登り40分位で登山口に到着し、休憩後に登山道を山頂めざし約2時間の行動である。当グループより先行していた20名位のグループで山頂は大混雑であるが360度の大パノラマには感激する。

飯士山は小さな山であるがコンパクトに全てがそろっていて短時間で全てが楽しめる山である。ゲレンデ内のハイキングあり急登の尾根、優しいクサリ場、頂上からのさえぎるもののない360度の展望と満足の山行であった。帰りはスキー場で山菜の

岩原スキー場ゲレンデにて

飯士山山頂にて

お土産を少しばかりいただきながら飯士山をあとにする。

下山後、宿のご厚意により風呂で汗を流し松井さんのお世話で「野ノ花館」を見学、すがすがしい気持ちで解散式を行い秋の五頭山での再会を楽しみに帰路についた。

集会委員長の遠山様に大変お世話になり感謝するとともに会員が益々元気に活躍されることを希望して報告としたい。

2018年 上高地集会について

事業委員会　小山　一夫

昨年は豪雨で上高地に入れず上高地散策で終わり、今年は再度「上高地集会」を計画しリベンジに燃え「美ケ原散策・焼岳・徳本峠」を計画しました。

会員20名、公募参加10名を募集しました。結果会員17名、公募参加者12名の参加者で開催しました。開催日の9月8日は新潟から雨で、松本地方の晴れを祈り出発しました。バスの中で新潟県警遭難救助責任者で支部会員の玉木大二朗氏より今年の遭難の実態や遭難事例を多く話していただきました。昨年と同じく県境付近で山研管理人の元川氏より、上高地は連続雨量80ミリを超えて、釜トンネルがいつ閉鎖されるかわからない状態との連絡があり、相談し美ケ原散策を中止し、急遽上高地へ向かう事にしました。昼過ぎ「山岳研究所」着。上高地は小雨模様で懇親会の時間を決め、自由行動にしました。翌日の偵察に行く人や温泉に入る人、帝国ホテルでお茶する人など各自自由時間となりました。16時より「懇親会」となり会員と公募参加者が一つの輪になりテーブルを囲み、桐生副支部長の開会の挨拶が有り、遠藤俊一氏より乾杯の音頭をしていただき、明日の天候の回復を祈り会員も公募参加者も一つになり大

上高地山岳研究所にて

いに盛り上がりました。佐藤副支部長の閉会の挨拶で懇親会を終了し、明日に備えました。

懇親会時の天気予報は「曇りのち晴れ」の予報でしたが、一晩中雨が続き、焼岳は雨の中出発しました。徳本峠は一時間後に小雨の中出発しましたが、明神池のかなり前で本格的な雨になり、徳本峠に入り30分位歩いた所で徳本峠は視界がきかないと予測のもとで徳沢を目指すことにしました。徳沢ロッジで名物のソフトクリームやコーヒーを飲み、河童橋経由で山研に戻りました。焼岳は雨の中、上高地より全員登頂しました。

今年も雨の山行でしたが、元川管理人の話では、7月初めは晴天が続きましたがその後、雨の日が続いたそうです。帰りのバスの中で再度「上高地集会」を提案し、来年は美ケ原のリベンジと乗鞍岳へ行くことで皆様から賛同をいただきました。来年こそ晴天の「上高地集会」になるよう祈りたいと思います。

雨の焼岳へ

日本山岳会　上高地山岳研究所をベースにした公募・会員合同の「上高地集会」

後藤　正弘

○山行地　北ア・焼岳（北峰2、393m）
（上高地から焼岳往復）
○期　日　平成30年9月8日(土)～9日(日)
○メンバー　焼岳グループ
（公募参加者8名、会員14名の計22名）
なお、徳本峠グループ（公募参加者4名、会員2名の計6名）、運転スタッフ・待機2名　上高地集会総勢30名
○コースタイム　【上高地山岳研修所：4時55分】―【登山道分岐：5時30分～5時40分】―【焼岳小屋：8時15分～8時30分】―【焼岳（北峰）：9時55分～10時10分】―【焼岳小屋：11時15分～11時25分】―【登山道分岐：13時25分～13時35分】―【上高地山岳研修所：15時5分】
（登り5時間、下り4時間）
※コースタイムは、1班のものを記載しています。

越後支部の上高地集会は今回で2回目。公募参加者と会員が一緒に日本山岳会の施設である上高地山岳研究所に宿泊して登山と親睦を図ることを目的としている。

初日は「美ケ原」のトレッキング、翌日は「焼岳」と「徳本峠」の登山が本年度の計画だった。結果的には、雨のため初日は「上高地散策」、翌日は「徳本峠」グループは徳沢までの散策となったが、「焼岳」グループは雨にも負けず全員登頂を果たした。

上高地山岳研究所を薄暗い時間に出発し、平坦な林道を歩き登山口へ着く頃には明るくなった。登り始めは樹林帯のなだらかな道をゆっくり登る。途中、「ハチに注意」の看板のある大きな倒木を避けるようにつくられた迂回路を慎重に登る。峠沢の押し出し辺りから、次第に傾斜が急になり、小

雨だった雨も強くなり雨具を着ける。

樹林帯を抜けると視界が開け、草地の先に岩場に架けられた大きな梯子が見える。高さ10m程の急な2段アルミ製梯子で、その上にはスラブ状の岩場があり鎖がかけられている。慎重に1人ひとり登る。このコース最大の核心部であった。ここを過ぎると笹の斜面をジグザグに登り、焼岳小屋のある新中尾峠に出た。相変わらず雨が降っているが、後続の2班を待ちながら休憩をとる。

ここから展望台の小ピークに登り、少し下降すると中尾峠となる。晴れていれば焼岳や周囲の展望が広がり元気が出るところだが、焼岳のゴツゴツとした岩斜面が見えるだけである。溶岩ドーム東斜面を左上にトラバースしながら、高度を上げていく。時折硫黄の臭気が鼻をつき、迫力のある大きな岩を見上げると活火山であることを実感する。

稜線手前で休憩をとり山頂をめざすが、途中でツアーグループがライチョウを観察している。私達も見ているとゆっくり歩いて岩場に姿が消えた。ここから右手の岩場を登ると、まもなく山頂へ到着した。

相変わらず視界は悪く、風も強いので1班だけで記念撮影して下山する。2班も時間的には大差なく登ってきた。

「焼岳小屋」前でランチタイムをとり、ゆっくりと慎重に往路を下る。上高地が近くなるにつれ、次第に天候は回復し対岸の霞沢岳方面の視界が広がってきた。登山口では、1班と2班が合流し無事宿へ戻った。

雨のため計画変更を余儀なくされたが、上高地山岳研究所の夕食会は公募参加者と会員が交流を深め、登山では強弱を繰り返す雨に最後まで翻弄されたが、山頂に足跡を残し、ライチョウにも出会えて元気に下山することができた。参加者から「良かった」の声があったことは嬉しいことだ。

「そのうちに晴れ上がるだろう」と願いながら登ったが、叶わなかった。それでも雨の焼岳登頂はいつまでも記憶に残るに違いない。参加者及びスタッフに感謝したい。

焼岳登山口にて記念写真

高頭仁兵衛翁の母校で遠藤支部長が講演

桐生　恒治

9月11日に高頭仁兵衛翁の母校である長岡市立深沢小学校で、遠藤支部長が子供達に講演を行いました。深沢小学校の加勢律子校長先生は、今年7月25日の弥彦大平園地での高頭祭に参加されて、地元の高頭仁兵衛翁の業績について児童達に話して欲しいと依頼され、遠藤支部長も快く引き受けて実現したものです。深沢小学校は、現在46名の児童が在籍しており、伝統行事として3年毎に高頭翁の講演と弥彦山登山を実施しています。

講演会場の図書室には、「わたしたちの大先輩　高頭仁兵衛さんの業績」と書かれた大きな紙が貼られており、子供達と先生の他に父兄の方々も多数参加されていました。遠藤支部長も子供目線での会話に苦労され、子供達にわかる言葉でかみ砕いて説明されました。

高頭さんは幼少時に体が弱かったが、先生に連れられて弥彦山に登ったことで丈夫で健康な身体になったこと、山登りで自然のすばらしさに感動してもっと多くの山に登りたいと思ったこと、日本の山について興味を持ち、調べるために漢学を勉強したこと、その資料を「日本山嶽誌」と言うガイドブックの分厚い本にまとめたこと、それが縁で東京の山仲間と交流することができたくさんの友達ができたこと、イギリス人のウエストンさんと言う人から「山岳会」を作りなさいと言われ日本山岳会が誕生したことなどの経緯をわかりやすく説明されました。漢字ばかりの「日本山嶽誌」の本を見せながら、高頭さんは勉強してこの漢字を全て覚えたのだから、皆さんも一生懸命勉強し、興味を持ったことをやり遂げ、人に恩返しして下さいと面白おかしく話し子供達も飽きずに真剣に聞いているのが印象的でした。最後に、弥彦山に登る時のリュックサック背負い方や物の入れ方を実演を交えて教えました。

講演終了後に子供達と教室で一緒に給食を食べながら、いろいろな質問に答えて有意義な時間を過ごしました。

長岡市立深沢小学校で講演

新会員になって

小野寺明彦

昨年12月9日支部晩餐会に初参加した時を思い出します。

私は30数年前、20歳を過ぎたころ旧国鉄の山岳会に入っておりました。先輩達には岩、沢、家族登山、山岳写真等様々なジャ

ンルを持つ達人がおりましたので飽きることのない時間を過ごしておりました。

その中に、ひとり三面川支流の沢に4日間入り「1度も人間に会わず、ゴミを見て気持ちがホットした」と、当時「人並み外れた方がいるのだなあ」と感心した方が坂井厚さんでした。晩餐会ではご高齢にもかかわらずお元気なお姿でした。

また、八海山高倉沢の雪渓では、常に私の足元に付き、自らの手で私の足を支えて下さったのが坂西徹朗さんでした。晩餐会では「毎日のトレーニングを欠かさず実行しなさい」と、はっぱをかけていただきました。

越後支部の初活動がこの晩餐会でしたが、山を通じてお世話になった方々にお会いし、さっそく楽しい1日を過ごすことができました。今後ともよろしくお願いいたします。

佐藤　真弓

子供の頃、山に登っていた父が帰ってくると、軒下の物干し竿に帆布でできたキスリングやテントが干してあり、見るからに重たそうにぶら下がっているのを見る度、未知な世界への憧れを抱いていました。そんな私が友人の誘いで初めて山に登ったのが、二十代半ばでの月山でした。憧れていた登山に踏み入れられたことがとても嬉しかったことを覚えています。それ以来、いろんな山にいろんな時にいろんな人たちと登らさせて頂き、年数だけは経ちましたがまだまだ未熟な登山者です。

その未熟な私が伝統ある日本山岳会に入会させて頂きとても有難く思っております。新たな諸先輩方から学ばせて頂き、また貴重な経験をお聞かせ願い、これからの山登りをより豊かにしていきたいと思っておりますので、ご指導含めよろしくお願いいたします。

江口　健

新潟市中央区に住んでいます江口　健と申します。昭和26年生まれ、67歳です。越後支部新人会員としての成長は、ちょっと無理の年齢です。健康だけが、唯一のセールスポイントです。

平成26年の新潟日報で、越後支部活動である公募登山（銀の道）の参加が支部入会する縁となりました。

子供の頃、夏休みに父親が八海山と出羽三山によく連れて行ってくれました。東京の大学を卒業後、数年間山登りに積極的に取り組みましたが、仕事の都合により新潟に戻り、27歳で中断。50半ばで、新潟日報の登山ツアー広告を見て参加。

できれば、仕事と山登りを両立させながら80歳位まで頑張りたいと思っています。現在月3回の山行きを目標に、一つ目は個人ガイドツアー、二つ目は旅行社の登山ガイドツアー、そして三つ目は主にトレーニングとしての個人山行を目標にしています。どなたかいっしょに登っていただければ幸いです。宜しくご指導の程、お願いします。

事務局からのお知らせ

会員拡大にご協力を!!

総会後5ケ月が経過しました。「山の日」記念事業として第61回高頭祭・第65回新潟県登山祭や第2回糸魚川世界ジオパーク「子ども登山教室」、公募登山（白鳥山、上高地集会）、第4回靴音・よりあいの集いなど、様々な活動を行ってきました。

活動の中で、参加者に日本山岳会への入会勧誘を行い、資料等も送付してきました。

また、最近はホームページから興味を持った人からの問い合わせがあります。

しかし、残念ながら入会に至っていないのが現状です。本年度残された期間、情報を共有し会員拡大に取り組みましょう。

皆さんの周囲をもう一度見渡し、是非ご協力ください。

平成30年度越後支部会費未納者は、至急納入ください。

越後支部会費（年会費2、000円）を未納会員は、至急納入をお願いいたします。

越後支部ホームページが拡充しました。

越後支部ホームページは、随時更新しています。楽しい内容になっていますので、是非ご覧ください。

越後支部の主要行事

越後支部の主要行事は次のとおりです。皆様の積極的な参加お願いいたします。

●平成30年度越後支部年次晩餐会
12月8日(土)　新潟市・新潟東映ホテル

支部会員動向

支部会員総数（2018年9月1日現在）　188名

2019年日本山岳会越後支部
第3回「上高地集会」の日程ついて

開催日　2019年8月24日(土)～25(日)

日　程

・8月24日　美ヶ原散策～日本山岳会山岳研究所（宿泊）

・8月25日　山岳研究所～乗鞍岳スカイライン～畳平～乗鞍岳～畳平～乗鞍高原散策

日程は変更する場合が有ります。会費は今年度程度か少し高くなる事が有ります。詳細は後日連絡します。

編集後記

今年は年明けの豪雪に始まり9月の北海道胆振東部地震に至るまで、本当に大きな災害が続いています。災害に遭った地域の方々には改めてお見舞いを申し上げたいと思います。

日本列島は、地形や気象などの自然条件から、豪雪、洪水、土砂災害、台風、豪雨、地震、津波、高潮、猛暑、火山噴火等の災害が非常に多い国と言われていますが、備えは万全でしょうか。私が以前携わっていたボーイスカウトのモットーに「備えよ常に」という教えがあります。「いつなん時いかなる場所で、いかなることが起こった場合でも善処ができるように、常々準備を怠ることなかれ」という意味です。全てに対応することは難しいと思われますが、我々が通常登山する際に持参している装備は災害時でも充分対応できるものであり、有効に利用したいものです。

（編集　石山政雄）